

## 東日本への道 ～PART2～

エピソードⅠが前橋育英高等学校ソフトボール部として小さな大会ではあったが、初優勝したときの喜びや、我が部の紹介、そして何より関東大会初出場の軌跡と試合の物語。エピソードⅡは東日本大会への初出場までの道のり。

そして今回エピソードⅢはまたしても東日本への道 PART2。

本来、このⅢこそは初関東、初東日本ときたので初の全国出場をと思っていたが、3年連続の3回目の東日本を決めた意味を述べる。



そもそも昨今、世の中は様々な現象が起こり、一高校生が一つの部活動に毎日励んで、苦しさや嫌なことを乗り越えて、何かに一生懸命打ち込むといった姿さえ容易に見られない。部活動なんかしなくても、アルバイトでもして、やりたいことをやる JK だらけ。そんな中、来る日も来る日もソフトボールを愛し、身体にむち打って、やっとの思いでつかんだ栄光・感動を伝えたかった。

今回の東日本大会代表決定戦もドラマがあった。

新人戦に限らず、大会に出ようと思う選手・チームは必ず優勝を目指すだろう。我がチームも当然であったが、いつになく道のりは遠かった。

育英ゾーンには桐生商業・伊勢崎清明・伊勢崎興陽・安中総合/太田女子（合同）と力のあるチームが集結した。

そして準決勝の相手は宿敵：健大高崎。



新人戦、2回戦 対桐生商業。初回、ヒットとエラーでいきなり2点を先制され、その裏1点を返すが、嫌な流れのスタート。

今まで何を一番重んじてきたのか。「初・一」のつく言葉。初回・初球・一人目・一歩目など。そこに集中できる準備を目指した。

そういう意味では大会の初戦は最悪の展開で始まったが、守備で我慢して流れを引き込み、逆転・追加点で勝利できた。



準々決勝 対伊勢崎興陽。この戦いも厳しかった。ヒット・四球でランナーを出すものの送りバントや進塁打ができず、ことごとくチャンスを先の塁でアウトにされる。結果は2-0であったが、他の試合でベスト4を決めたチームは全てコールドで準決勝に進む。そして、ベスト4に残ることは次の大会のシード権獲得も意味する。

ここまで二試合、優勝まであと二つ。4回勝てば優勝だが、その二つはまたさらに厳しい。

チーム	1	2	3	4	5	6	7	8	9	合計
青森育英	0	0	1	2	0	0	0	0	0	3
大田商業	0	1	0	0	0	0	0	0	0	1

  

位置	1	2	3	4	5	6	7	8	9	投手
青森育英	藤田 大									
大田商業	藤田 大									

今まで、次につながる大会で決勝まで試合をしたのは初関東の一度。春季・夏季大会などで優勝・準優勝はあるが、県の代表として次の大会に出場はしてない。そういうことではこの代表決定戦で勝ち取ったことは非常に意味ある勝利であった。

ここ三回の東日本出場も初出場は前年度の優勝枠での参加。

二年連続二回目は地元開催の地元枠。

三度目の正直は真の勝者に与えられた権利である。

しかも、初出場は埼玉開催、予選から決勝トーナメントまで一勝もできず。

二度目の群馬開催は1部トーナメントに残るも初戦で敗退。この大会にかける思いも違う。



我が校の各部活動では県一位は当たり前、関東・全国でも上位を目指し、また全国制覇をも実践している。そんな中、職員朝会で各部の優勝報告を聞いたり、事務室前の優勝旗の数々を見ていたりすると、我が部もまだまだと思う反面、選手が頑張り、保護者と指導者も一緒になって感動したこの思いを是非とも伝えたくてエピソードに加えた。

準決勝で負けた日も反省会を行い、次こそはと気持ちを入れ替えたことは数知れないが、勝った日の美酒があるから、こうしてまた次の目標に向かって頑張れるのだと確信した。最後に、来春の東日本大会での我が前橋育英高等学校ソフトボール部の活躍と、これを読んでもくださった多くの方々、いつも応援して下さる皆様のご健勝と、ご発展を祈念して、近い将来、エピソードⅣで全国出場を報告できる日を目指して結びとする。